

遅れて学ぶ日本史

白分の性格がどのような仕事に適しているのか。高校生のころ、常にこのことばかりを考えていた。いろんな職に就いている未来の姿を想像してみるのだが、どれもしっくりこない。

文科系の科目は好きだったが、日本史は人名の読みと、複雑な姻戚関係がどうしても頭に入らなかつたのであきらめ、世界史を勉強した。ある日、世界史の授業中にふとした想いが浮かび、静かな教室の中で思わず声をあげてしまっただけになった。教科書に登場する偉人、英雄、悪人たちはすべて死んでしまっているのだ。

彼、彼女たちの遺した華麗な業績や冷酷な悪行の記述よりも、どんな人間もみな等しく死んでしまうのだ、との行間の根源的な事実の方がはるかに鋭く胸を射た。ならば、人の生死に直接携わる仕事に就こうと決めて医者になった。そうやって他者の死に向き合う暮らしを営んでいたら、こんな大事を内に抱えたままではとうてい生き延びられそうもなかったから、自己開示の手段として小説を書きだした。

もう二〇年以上も前、戦乱のカンボジアからタイに逃げてくる難民の救援医療のためにタイの僻地に出かけた。難民収容所の病棟で、医療助手として手伝ってくれたカンボジアの若者たちはとても冷静に日本という国を見ていた。

「日本が経済的に発展したのは寒い冬があるからだと思う。冬に備えて家を頑丈に作り、衣類を買い込み、食料も保存しなくちゃならない。国民は勤勉にならざるを得なかつたはずだ。でも、カンボジアは雨季と乾季しかなくてTシャツと短パンとゴムぞうりがあれば暮らせるし、果物も米もいつでもとれるから、がんばる必要がないんだ。日本が戦争や地震で大変なことになつたら、こんどはカンボジアに来るといいよ。きっと日本より住みやすいと思うよ。」

いまでもときどき、暑すぎる室内から逃れて、病棟の前の外灯の下で語り合った難民の医療助手たちの顔を思い出す。あのとき、自分が生まれ育った国の成り立ちに関して語れる言葉を持たないのがなんとも情けなかつた。

医者になつて四半世紀が過ぎたころから、死は他者にだけ降りかかるのではなく、自分のすぐそばに寄り添っているものだとの明確な認識が生まれた。ならば、自分が生きて死んでゆくこの国とはいったいかなる処なのか。

五〇歳を過ぎてようやく日本史の勉強を始めている。そもそも日本という国名がいつから用いられるようになったのか。そのあたりを論じる書物を読んでいると、家の前の見慣れた田園風景すら微妙に様相を変えて身に迫ってくる。



イラストレーション：栗岡奈美恵